

くちびるの咲いて白魚呑まれけり

藤田湘子

俗に白魚の踊り食いという。細長く透き通る七センチほどの魚を、生きたまま喉の奥に流し込むように啜り、噛まずにつるりと飲み込むのである。早春の酒の肴に珍重され、春の訪れを感じる。

料亭などで、生きて泳いでいる白魚が出されると、その野蛮さに目を覆いたくなるが、そこは座興。目を瞑りながら思い切って飲み込んだ時、食道を動きながら落ちてゆく白魚のあはれに、思わず息を殺した記憶がある。

赤い紅を引いた唇がぱっと開いて、透き通るような白魚があつという間に呑みこまれ消えてしまつた。美しく流れれるような早業、惚れ惚れと見とれてしまう呑み込み振り。くちびるが「咲く」という表現にそれを感じる。

1996年（平成8年）第十句集『神楽』 鑑賞・野本京